前

平成十七年度　入学試験問題

国語

一五〇点満点

≪配点は、学生募集要項に記載のとおり。≫

（注　意）

一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。

二、問題冊子は1ページから10ページまでの10ページ、解答冊子は表紙のほかに12ページ（うち6ページは下書き用）ある。

三、問題は全部で3題ある。**総合人間学部の〔理系〕・理・医・薬・農学部志願者は、3題のうちから任意の2題を選択すること。総合人間学部の〔理系〕・理・医・薬・農学部志願者で3題とも解答した答案は無効になる。**

四、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。**総合人間学部の〔理系〕・理・医・薬・農学部志願者は、選択しなかった問題の解答欄に斜線を引き、選択しなかったことを明らかにすること。**

五、筆答開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。

六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。

七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。

八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

一

次の文を読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

(1)我々の知性は何よりもまず植物的性格である。我々は自然に対する極めて敏感繊細な感覚と感情と叡智とをもっている。これは我々の先天的な素質というよりも、風土的環境との交渉において生成した性質である。我々の知性の風土的性格はたんに季節風地帯という一般的制約のみからは理解されない。我々の環境はたんに季節の循環性を特色とする温帯に位置するだけでなく、大陸に対する位置、地質的構造、水陸の分布等々の極めて個性的な独自な条件が我々の風土の具体的な個性的性格を決定する。そこに存するものはすべて複雑多様・動揺可動を性格とする如き自然である。植物の多様性、したがってまた農作物の多様性もそれに関する。動物の種類の多様性はまたこれに依存する。海岸線の長大、寒流暖流の錯綜が多種豊富な魚類をもたらす。しかし我々の多様はたんに異種の並存というだけではない。正反対のものが対立している。例えば温暖な花咲き風薫る田園もたちまちにして台風洪水の修羅場となる。しかしその対立は持続的でなく暫時的である。暴風の猛威は旬日以上にはわたらない。たちまち一過し去り、その後には何らその痕跡を止めない明朗な依然たる天地が存するのみである。「風光明媚」も地震地帯の性格である。通常、「不動」の象徴とされる「大地」も我々にとっては不断に動いている。近代科学の基礎観念である自然の一様性も我々の感性にとってはたんに言葉にすぎない。可能なる限り多様であり複雑である。(2)自然は恒常性法則性においてよりもむしろ逆に無常として理解される。

これらの風土的性格は同時に我々の知性の性格である。自然の支配というような観念は想到されることもすべてなかったであろう。ただいかに随順すべきかの智恵のみが問題である。かかる多様可動な自然に対処して生きるために、我々は自然に対する精緻な観察と敏速な行動とを訓練されてきた。確かに我々の衣食住の生活様式には我々の精緻な自然認識に基づく智恵が看取される。しかしそれはあくまで受動的な経験的知識である。積極的に自然に働きかけ、自己の意志に順応せしめようとする行動的構成的知識ではない。我々の自然の如き複雑多様な自然に対してはこれが最も賢明なる智恵であったかもしれない。複雑多様な我々の自然は分析抽象に堪えず、予測し難い天変地異に対してはその因果性の追究を拒むものがあったであろう。

かかる自然に対してはもっぱら自然に随順する受動的態度が最も賢明であったでもあろう。自然の活動力は支配し利用さるべき動力ではなく回避さるべき暴威であり、せいぜいで受容されるべき恩恵に外ならぬ。我々の精神の植物的性格はかくして成立したのであり、そしてそれはまた我々の境位においては最もよき智恵であった。

そこでは自然への随順、むしろ自然と合体することが理念的な在り方である。自然との対立も自然からの独立も意志されない。(3)したがってそこには空想力や想像力が微弱である。空想や想像は自然からの意識的なあるいは意識における可能的な独立、超越に外ならぬからである。これは*realismでもなく*idealismでもない。汎自然論である。植物的精神の性格に外ならぬ。我々の文学の伝統には喜劇も悲劇もない。人間の愚昧を高所から冷笑する知性の文学も強靭な性格の受苦を摘出した意志の文学もない。もっぱら情趣的な気分の文学である。このことは結局は自然と区別された、自然に対立する「精神」の意識の欠如に外ならぬ。逆に言えば精神に対立する客観としての自然の意識の欠如である。我々の伝統には「魂の発展」を内容とする文学がない。それは内的にして発展を本性とする魂の観念そのものの欠如による。日本の文学で端的に日本的であり、したがってまた最も古くかつ最も洗練された短歌並びにそれの変容としての俳句においてこの性格は端的に現われている。ここでは精神は有機的に自然と一体となり、自然は精神と融合している。そこでは人間の心即自然の声である。自然の晴曇は直ちに心の明暗である。日本人がほとんど誰でも歌人俳人であり得るのは、その詩型が単純平易であるからではなく、(4)日本人自身の存在の仕方が詩的文学的であるからである。

しかしこの文学的性格は哲学的・科学的・道徳的ないし宗教的から区別されたそれではない。それらすべてに通じるものであり、それ故歌道や俳諧の道が同時に悟道であったり、道徳であったり、学問であったりするのである。これは今日の日本の知識人においても何らかの仕方で認められる性格である。我々の知識人の知識は文学であって哲学でもなく科学でもない。日本の知識人は思想や知識に対して必ずしも潔癖ではない。論理の整合性とそれの堅持に対する情熱は必ずしも強烈ではない。種々なる思想の送迎に当って人々はいかに処するかを顧みれば明らかである。ある思想を受容しこれを愛してもさらに新しき思想を迎える場合にはまず気分的に移易し、必ずしもこれに対する思想的清算の過程があるわけではない。極端に言って(5)純粋

な思惟が独立していないのではないかとさえ言える。

（下村寅太郎「知性改善論」より）

注（＊）

realism＝実在論。

idealism＝観念論。

問一　傍線部(1)において、筆者は「我々の知性」の性格が「植物的」であると主張しているが、それはどういう意味か、わかりやすく説明せよ。

問二　傍線部(2)はどのような意味か、わかりやすく述べよ。

問三　傍線部(3)について、筆者はなぜ「空想力や想像力が微弱である」と考えているのか、説明せよ。

問四　傍線部(4)について、日本人の存在の仕方が「詩的文学的」であるというのはどのような意味か、わかりやすく述べよ。

問五　傍線部(5)はどのような意味か、わかりやすく述べよ。

白

紙

二

次の文は横光利一の小説「天城」(昭和十六年)の一節である。新入社員の宇津は、社員旅行で皆と一緒に天城山に登り始めたが、思いのほか険しい坂路で次第に遅れ始める。同じく新入社員の畑中は、従来の社の不文律に反して社員同士で結婚する予定だったため、水を入れた薬罐(やかん)を一人で持たされている。これを読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

「薬罐少し持ちませうか。僕は弁当を持つだけでも重いんですが、たいへんでせう。」

宇津はかういひながら弁当だけではなく、片方のポケットに入れてゐた湯呑(ゆのみ)の重さもまた感じた。これも山上で水を飲むときの用意に各自が一つづつ持つて来てゐたものだつた。

「よろしいよ。どうです、いつぱい水飲みませんか。」

畑中は返事も待たず自分の茶碗に水を入れかけた。生唾(なまつば)も咽喉(のど)から切れかかつてゐるほどのときだつたから、一ぱいの水も実にこの坂路では欲しかつたが、やはり誰も飲まずに登るのに、自分ひとり飲むのは宇津も気がさした。

「いや、僕はもう結構ですから、どうぞ。」と彼は急いで押しとめたがもうそのとき畑中は茶碗に入れた水を彼の方へ出してゐた。

「これはどうもすみません。」

宇津は茶碗へ唇を附けかけてみたものの、ふと考へてみれば、一杯の水と雖(いへど)も共同のものであることに間違ひはなかつた。またそれを飲んだとて事立てて怒るもののないことも分つてゐた。が、この度の登山に限り人生行路の競争を模擬してゐることは、暗黙のうちに誰も感じてゐることだつた。してみれば、(1)ここにも自ら犯してはならぬ不文律がひそかに生じてゐる筈だつた。山麓(さんろく)を出発する時の条件を共通にして、罰則として畑中ひとりが水を持たされてゐるのも、つまりは彼の罰だつた。それにそのとき、またこつそりと彼から一杯だけ貰(もら)ふことは、宇津も同様に罪を持たされた結果となつて、(2)不意に襲つて来たこの愛情の重みの処置には多少のうるささも附きまとつた。宇津は茶碗の水を持つたまま、これを零(こぼ)してもならず、飲み干してもならずといふ細かい辛苦でまた坂路をつづけていつた。

そのうちに時間がたつて自然に水も零れてしまふにちがひない。しかし、それまでは自分だけに特に降りかかつてきた災厄として、宇津も適当に心を用ひて責任を果したいと思ふのだつた。ときどきひと思ひに水を飲んでやらうか、とも思ふこともあつたが、(3)何か厳として飲まさぬものが、自分の外の山中の青さの中に潜んでゐた。

「天城は山だと思つてゐなかつたのに、随分こりや嶮しいですね、どうしてこれは。」

と宇津は、まだ茶碗を返さぬ彼に不審を抱いたらしい畑中から視線を反らして云つた。誰も苦しいときとて物も云はなかつた。つづら折りの山路は今度は折れもせず、一層急な坂になつて来た。平坦な道でも小さな茶碗の水を零さずに歩くことは難しいのに、それに急な坂路を水も流さず登ることは至難だつた。また自然に流れ出る水を待つてゐたとて喜ぶものは誰もなかつた。模擬としてみても、これはあまりばかばかしい実験だと宇津は思ふと、(4)つい気が弛んで彼は茶碗の水を飲んでしまつた。

「ああ、美味い。どうも有難う。」

宇津が畑中に茶碗を返してゐるとき、後から来たものがそれを見つけてどつと集まつて来た。そして、「一寸、一寸。」と呼びとめてこつそりとまた水を飲んだ。飲んでから一人が唇を拭きながら、

「みんなの水を飲んで、こりやすまんね。」とにやにや笑つて云つた。

「少しでも飲んで貰ふ方が軽くなつていいですよ。」と畑中は笑つた。彼は水を持たされる番であるから、飲むものの辛さの方が分らぬのだと宇津は思つた。

飲み終つた共犯者だけまた軀を左右に振つて坂路を登り出したが、宇津は登る気力の中から薄黒く曇つた気持ちの降りて来るのを感じた。人に後で分つたとて恐れることはないとはいへ、何となく霽れぬ気分は爽爽しい山気と反対に、だんだん重く心に溜り込んで来て取れさうもなかつた。同じ山を登るなら、爽快に山上の空気を吸ひたいと思つてゐる一行の登山であつてみれば、裡に心の曇りを抱いてゐては、何のための山登りだつたのか、これは無益なことになつたと、(5)宇津の後悔はさらにまたこのときから別なものに変つて来るのだつた。

急坂はまだつづいてゐた。勢ひ立つて先に登つていつた者らも宇津たちに追ひ抜かれて来た。熊笹の中に腰を落してゐるものらも多くなつたが、宇津はそれらを抜くたびに、もう鷹揚(おうやう)な挨拶も出来ない心の渣滓(さし)を感じた。

注(＊)

渣滓＝沈殿物。おり。

問一　傍線部(1)はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

問二　傍線部(2)はどのようなことを言っているのか、「愛情の重み」の意味するところを明らかにして説明せよ。

問三　傍線部(3)はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

問四　傍線部(4)について、その理由を説明せよ。

問五　傍線部(5)について、「別なもの」とはどのようなものか、説明せよ。

白

紙

三

次の文を読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

我が難波のふるさと人の、母一人を、兄おとと妹はらから三人がかしづきて、(1)兄は老いゆくままに、「めとれ」といへど、「いかなるものの出で来て、親につらきことやあらん」とてむかへず。弟といもうとは、人の養はんといへど、母のかたはらを去らじとてゆかず。母物に詣でんといへば、弟兄二人して輿にかきのせ、になひもてゆく。妹はつとそひてなぐさむる。はたおほやけに聞こし召されて、物かづけ、重く賞ぜさせ給ひしなり。(A)ある人の母これを聞きて、「あなたふとし。かかる宝の子を産みならべし人は、神ほとけの化身にや。ただいぶかしきは、めとらず養はせず、後いかなりともはかり思はで、その輿に乗りて出で遊ぶらん親の心こそ知らね」と、我に語られし。これも世のことわりに承り侍りき。

また鎌倉の何がし寺に住ませ給ふ大徳は、伊予の国大洲の浦辺に、いさりする人の子とか。*知識の名天の下に聞こえ給ひしかば、国の守の菩提院に召されて、道の教へを聞かせ給ひし。この便につきて、まづ母の老いておはすを拝み奉らんとて、詣で給ひしに、(B)母のいはく、「おもひきや、蜑の子のかくたふときになり昇りて、*かうの殿の御召しをさへかうむらんとは。されどそれただ才能のかたの学びをえて、まこと仏の教へにはうときにやあらん。さきざきの便ごとに、文に巻きそへて、黄がね白かねをおくりたまはること、いかなる心ぞや。今の子の立ち走りて、網曳釣だにせば、たふとき財宝をも何にかはせん。この贈らるるは、世の人の仏に奉りし物ならずや。さらば道のためにこそちらすべきを、浅ましき世わたりする身の、これを納めて、いかばかりの罪をかむくはれん。(2)親のため思はぬなり。いと恐ろしさにかへすぞ」とて、つつめるままあまた投げあたへぬ。大徳おそれみかしこみ泣きわびぬとや。これら人の語りしままなれば、まこと偽はしらねど、学ばでもかくたふとき人もありけらし。

（上田秋成『藤簍冊子』より）

注(＊)

知識＝善知識のこと。ここでは高僧の意。

かうの殿＝藩主。

問一　傍線部(1)を現代語訳せよ。

問二　傍線部(2)を、意味が通るように、ことばを補って現代語訳せよ。

問三　傍線部(A)「ある人の母」はどの点を「たふとし」と考え、どの点を「いぶかし」と考えているのか、説明せよ。

問四　傍線部(B)について、「母」は何を言おうとしているのか、簡潔に説明せよ。

問五　筆者は、この二つの挿話を通して何を言おうとしているのか、わかりやすく述べよ。

問題は、このページで終わりである。